

Title	戦争の地理學的考察(八)
Author(s)	小川, [琢]治
Citation	地球 (1930), 13(4): 237-244
Issue Date	1930-04-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/183746
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

地球 第十三卷第四號

昭和五年四月一日

戰爭の地理學的考察（八）

小 川 琢 治

三

前稿に於いて關東地方の西邊を成す甲駿豆三州の中、甲駿兩國と相州との交界地帶の考察を試みた。次には之に續いた伊豆半島の戰略地理上の意義如何が問題となる。

駿相兩國の間に介在する伊豆國の位置は太平洋に突出した南北に延長する半島を成して駿相兩灣を分ち、東は近く房總半島に西は遠く遠州紀州の突角に對し、その南端は東海道海上交通に對して要地となつてゐるが、この位置の意義を十分に發揮する様な海戰は未だ曾て行はれなかつた。その理由は鎌倉と京との間に中世の戰爭の起つた頃には海上交通の機關たる船舶が風波を凌ぐに無力にして航海術も亦た幼稚であつた爲めで、東鑑によれば元暦二年（一一八五）三月平家征伐の爲めに兵船三十二隻を鯉名（手石）妻良に浮べたといふ位で艦隊に組織された海軍が互に對抗して制海權を爭ふ可能性がなかつたのである。治承四年（一一八〇）八月頼朝が石橋山の一戰に敗れた時に、扁舟に棹して安房國平北郡獵島に著いたといふのは、兩半島間の海上交通を利用した一例であるが、退路

を看出し得たまでである。

故に伊豆半島で戰略上に有力なる地區はその北端の駿相兩國界に突出した狩野川の下流三島附近で、此處に國府が置かれてゐた意味も極めて明瞭である。然れどもこの意味が判然と認められたのは遙かに後れて、頼朝が北條時政の後援の下に蛭ヶ小島に起つた以來である。

北條の位置は三島の南二里餘の狩野川溪谷に在つて、川は南條の西で天城山西北麓に迫つて西北に迂回し、韮山はその東北に在つて、頼朝の以仁王の令旨を得て兵を起すに當り、治承四年八月十五日の夜襲を試みた八木の平兼隆が館の所在地である。此の近傍には川の左岸に義時の居た江間、天野藤内遠景の居た天野等があり、又た土肥河津等への山路の交通も出来る。

頼朝は先づ兼隆を撃ち取つた勢に乗じて、相模から討伐に向つた大庭景親を逆撃する爲めに、此處から半島の東岸に打つて出て石橋山に陣を取つた。その通路は輕井澤峠を越えて熱海に出たか、又はその北の日金山北を越えて湯河原に出たものと想はれ、その意中を察するに、僅かに三百餘騎の寡兵を以つて三千餘騎と稱する平家の大軍に當るのであるから、箱根東麓の狹岸を利用して戦鬪の正面を出来る限り狭くして、三浦黨がその背面を衝くまで支へて、挾撃せんとしたのである。然るに此の時に伊東祐親は頼朝の後山からその側面を襲はんとし、景親は三浦黨の來着前に無勢の頼朝の本隊を撃破せんとしたので、治承四年八月二十三日の夜戦が景親の攻勢によつて始まり、衆寡敵せずして僅かに身を以つて免れたのである。

鎌倉幕府が成立した後は此の地區は東海道に打つて出る足溜りとして重要な役割を演ずること

なり、又た東海道駿遠地方から鎌倉を控制するにも便なる爲めに、長祿元年（一四五九年）に足利政知が室町から派遣されて堀越（寺家の西）に居館を構え、堀越御所と呼ばれることゝもなつたのである。

伊勢新九郎長氏は堀越御所を滅して葦山に據り北條氏を名乗ることゝなり、その後氏親（早雲）が小田原に移つた後にも葦山城は要地となり、秀吉の小田原攻めに當つて、氏規は之に據つて織田信雄、蒲生氏郷、福島正則等三萬五千の大軍に當り、固守して屈せなんだのは坂東武者の技倆を發揮して人口に膾炙する武者振りであつた。

此の地區は狹隘なる山間の溪谷平野にして、形勝の雄大なる地勢に非ずして、武家政治勃興の地點となつたのは、頼朝の流寓が偶然その端緒を開いたに過ぎぬとはいへ、半島頸部の交通上に對する戰略地理上の關係が與つて多少の力あることは認めねばなるまいと想はれる。

二三

關東平野の西邊縁を成す第二の地帯は富士川溪谷により聯絡する甲府盆地と西駿沿岸とである。前者は既に關東地方の西方交通縁と關聯して略説したが、甲府盆地そのものに固有なる戰略地理上の意義も亦た一考に値するから左に述べる。

甲府盆地のこの方面に關して材料は大永元年より天正十年に至る武田信虎、信玄、勝頼の三代六十年の戰爭を記載した甲陽軍鑑合戦之卷略譜小解四卷が最も詳細である。此の書は武田氏の勃興から、攻勢を取つて兵を隣國に出して駿遠信毛の諸國を席卷した光輝ある戰史にして、正確なる史

學的事實であるか疑はしい節があつて、考證の餘地あるは勿論であるが、掌大の山間に蓄積した勢力が周邊一圓に擴大されて行く徑路が面白く描かれてゐるのである。

但し此の書は信玄一代の戰功を誇張して書いたもので、その以前明應四年、五年、文龜元年、二年（一四九五—一五〇二年）信昌の頃に北條早雲が甲州を攻めて籠山を越えて都留郡に侵入したことがあり、永正四年（一五〇七年）信虎の相續後に郡内を征服し、十年（一五一三年）石和いしわの館から古府の躑躅崎つじぎまきの館に移つたのであつて、此の間に郡内の方面で取り合つた記載はない。

他國勢の甲府に攻め込んだ最初の記載は大永元年（勝山記はその前年即ち永正十七年（一五二〇年）五月頃の今川家の福島兵庫頭正成駿遠兩國の兵一萬餘にて、下山通り即ち富士川に沿ふて侵入したことで、甲府の西の下山街道に當る飯田河原まで攻め込み、對陣六十餘日の後荻原常陸の伏兵齊起の奇謀により二千許りの寡兵を以つて之を殲滅し得た。信玄は信虎の此の勝ち軍さの日に生れたので勝千代といふ幼名を附けられたといふ。富士川溪谷の下流から侵入する駿河勢に對する守勢の戰爭は此の一戰のみである。

之に比して甲府盆地の出入に最も便なる交通線はその西北に開いた釜無川の構造谷である。之に沿ひ一直西北に溯れば、天龍川上流の諏訪湖盆地まで殆んど爪先上りに平坦なる狭い溪谷平地を行き、その先は鹽尻峠を越えて松本平に下り、天龍川に順ひ西南に向へば伊那平に下り、尙ほ又た正南に眞志野峠を越ゆれば赤石山地の北の尖端に當る三峰川に臨んで高遠にも出られる。諏訪は諸大川の上流の放射狀に流出する地形上の中心たるのみならず、又た交通の中樞を成す場處である。大國主

命の國土を天孫に譲られた時に建御方神が出雲から此處に遷られたといふ神話は此の交通の要地が神代に於いて既に重大なる役割を演じてゐた事を窺ふに足るのであり、養老五年(七二一年)から天平三年(七三二年)まで暫くの間諏訪の國の置かれてゐたことなども此の考へ方を裏書する材料である。然れども此の溪谷の甲信國境を横ぎる處よりも南に於いて、八ヶ嶽の東麓に沿ふた千曲川上流に通ずる佐久街道が若神子を経て直北に通じてゐる。之に沿へば岩村田小諸に出で、此の線から東に向ひ碓氷十石等の諸嶺を越ゆれば上野に入ることが出来るし、又た小諸から西北に向ひ上田を経て河中島の平野即ち善光寺平にも出ることが出来る。尙ほ又た上諏訪の手前から大門峠を越えて長窪丸子を経て上田に出ることも出来る。

信虎信玄の作戰線を追跡するに、此等の諸線上の要地を順次攻略し、信玄の代に殆んど信州一圓を版圖に収め得て、關東及び東海道の方面をも攻略するに及んだものである。

信虎の甲州一圓を占有せんとする大永享祿の頃に信州に割據した豪族を舉れば室町幕府の信濃國守護職を預つた小笠原貞朝は筑摩郡松本城に、同貞忠は伊那郡松尾城に諏訪頼滿は諏訪郡高島城に村上頼平は河中島に、木曾義元は木曾福島に、平賀源心成頼は佐久郡平賀城に據つて、佐久小縣兩郡に尙ほ大井望月相木伴野市河長窪海野等の諸豪族がゐた。

その内で先づ甲州と勢力の衝突を起したのは諏訪頼滿で、信虎が北條氏綱と都留郡で戦ひつゝある間に頼滿とも戦ひ、殊に享祿四年甲州内部に飯富栗原等の諸族が内通して頼滿の援兵を乞ふた時には諏訪勢が盆地内に侵入したことがあつた。

二四

甲州勢の信州侵入は天文五年十一月信虎の佐久街道海ノ口城攻めがその序幕であつた。此の城は中山道岩村田から甲州に入る境上を扼する要點なれば、平賀源心が後詰して八千の甲州勢は三千許りの城兵の固守に對して、積雪の際として如何ともし難く、終に兵を收めて退く外なかつた。然るに殿りを所望した信玄の奇襲功を奏し、源心の不意を掩撃して之を討ち取り、初陣の功名を揚げ、又た此の勝利の結果として信虎は佐久郡に入り殆んど同郡を攻略し得た。

然るに天文七年（又は十年）信玄が舅今川義元に結び信虎を駿河に逐ひ國を纂ふたので國內の不安を生じ、佐久郡又た村上氏に歸し、九年にはその兵甲州に侵入し、閏六月二十日飯富兵部は之と念場ヶ原に戦つて撃退し、諏訪頼満の子頼重（茂）も亦た小笠原長時と共に此の弊に乗じて韭崎まで侵入した。

韭崎合戦は甲州勢六千七百を以つて敵の兩旗九千六百に對する激戦にして、飯富甘利小山田板垣の四宿將は善戦して之に當り、信玄も亦た麾下の兵を以つて之を横撃して敵陣を陥れ、甲府留守の原加賀の才覺にて地下人町人五千人を募り紙の旗と竹の柄に古長柄の身を指込み韭崎に馳せ向はせた虚勢により信州勢の膽を寒からしめ、漸く勝勢を決定し得て、之を撃退したといふ逸話がある。

此の前後に飯富兵部は若神子にて村上勢に當り、板垣信形は臺ヶ原葛木にて諏訪勢に當り、信形は海ノ口の北に當る海尻の城を取つたが、積雪の時に土豪蜂起して村上勢を引き入れ、二三の兩郭共に陥り、小山田備中の本丸を固守するのみとなつたが、信玄の急遽兵を出し、麾下を以つて先鋒

となつて猛襲したので漸く村上を撃退した。軍鑑によれば是は天文九年正月晦のことで、續いて二月十八日に村上勢三千五百が大門口を越えて小荒間まで侵入して來たが、これまた信玄麾下の兵を率いて急行し、夜襲により撃退した。

この海尻小荒間兩合戦は甲州の内亂に乗じた信州側の攻勢に對する守勢の戦鬪にして、此の形勢は天文十一年まで續いて瀬澤平澤の兩合戦も起つた。三月九日の瀬澤合戦は村上諏訪木曾小笠原の四旗一萬五千の大軍が甲信境上の瀬澤まで侵入し、甲州の老將は今川家の援兵を乞ひ、海尻の城を撤退して、敵兵の國內侵入を待つて信玄信繁兩軍にて之に當らんとの見地であつた。然るにその萬全の策を排して信玄は八千の兵を以つて國境に向ひ、飯富甘利板垣小山田の四將をして、各諏訪村上小笠原木曾の四軍を衝かしめ、自ら麾下を以つてその危い方を助けることとし、九度の激戦により之を撃退した。然るに閏三月十一日村上勢二千五百再び若神子まで侵入し、引返して平澤に陣したので、十九日信玄は甲府を發して廿日之を撃破した。

二五

信玄攻勢の戦争は此等の信州勢の侵入に對する報復戦に始まる。國誌資料叢書によれば同年六月四日伊那城主高遠頼嗣と結んで七千五百の兵を以つて諏訪郡に侵入し、諏訪勢を挾撃して之を破り高島城を陥れ諏訪の小城に迫つて諏訪頼重を降して之を自殺せしめ、九月續いて高遠頼嗣をも破つた。軍鑑には頼重(茂)の降服を十三年二月十日再度の出馬後の事とし、頼重を殺した爲めに諏訪郡は再び叛いたといひ、信玄の猜疑心深くして降將を殺して敵國の歸服を躊躇せしむるに至つた片鱗

を露はしてゐる。

同年十月七日信玄は八千餘人を率いて甲信境上の萬窪に至り、十二日大門峠を越えて十五日長窪を焼き、大門峠の南に引き上げて逗留し、二十三日村上小笠原兩旗一萬三千許りで峠を越え追ひ來るに遇ひ、三合の後四合目に麾下を以つて脇よりかゝり、原加賀守は右より撃つて勝利を獲た。

此の年一年の中に甲信間に三度の合戦があつて三度とも甲州側の勝となり、その武威は信州を風靡し、佐久郡相木城主相木市兵衛は武田氏に歸服し、再び佐久郡に勢力を張ることゝなつた。

天文十二年十一月信玄は信州に侵入して九城を略したといひ、軍鑑は十三年初めて諏訪頼重を降して之を殺したので諏訪衆が叛亂を起し、十四年正月に信繁信形日向大和等が諏訪を攻め叛將祝部ひょうを討ち取つて初めて諏訪郡が武田氏の所領となつたといふ。

此の年五月十三日信玄は甲府を發して佐久郡に入り、十五日小諸に着き、小諸城代小山田備中、内山城代飯富兵部等の佐久郡の措置を評議しつゝあつたが、諏訪郡高島の城代板垣信形より木曾小笠原の兩旗が鹽尻峠を越えて諏訪に向はんとし、伊那勢も之に加はり襲來するとの注進を受けた。信玄は此の報を得て直ちに小諸を發し、長窪を経て和田峠を越え、二十三日小笠原勢の鹽尻峠を下り、木曾勢と共に來り攻むるを待ち受けて、之を撃破したが、伊那勢の退却を追撃した信形のみはその挾撃に遇ひて多數の死傷者を出した。信玄は二十四日鹽尻峠を越えて之を追撃し、桔梗ヶ原に出でたが、村上勢の小縣郡に出て敵軍に呼應するを聞き、二十七日小諸に向ひ、村上氏の城下を焼き引き返した。